

令和元年6月26日現在

機関番号：14401

研究種目：基盤研究(A)（一般）

研究期間：2014～2018

課題番号：26245078

研究課題名（和文）学力格差の実態把握と改善・克服に関する臨床教育社会学的研究

研究課題名（英文）A Sociology Study on closing academic gaps of school children

研究代表者

志水 宏吉（Shimizu, Kokichi）

大阪大学・人間科学研究科・教授

研究者番号：40196514

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 31,000,000円

研究成果の概要（和文）：この5年間にわたる研究プロジェクトでは、現代の小・中学生の学力格差の実態把握とその改善に向けての方策の探究とを目的とし、学校班・家庭班・国際班・統計班の4チームに分かれて調査研究活動を続けてきた。その成果は、今年度中に明石書店から刊行される4巻本（それぞれのチームが1冊を担当）において包括的に公表される予定である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の意義は、この20年間ほどにわたって大きな教育課題の一つと見なされてきた「学力格差の縮小・克服」に向けての具体的・実践的な示唆を提示したことである。PISA・TIMSSといった国際学力調査の再分析、ヨーロッパ・東アジア計7カ国における事例調査、特定自治体の4つの学校における3年間の継続観察調査、および同自治体における家庭（13世帯）での参与観察調査といった研究活動を通じて、いくつもの新たな知見を提出できた。その具体的中身は、上記の4冊本で展開される。

研究成果の概要（英文）： During five years (2014-2018), we have investigated the academic gaps of primary and lower secondary school children in Japan and the examples of how to tackle the issue in four teams (the international team, the statistical team, the school team and the family team). All the findings of this research will be published a series of books (four volumes) by Alashi Shoten.

研究分野：教育社会学

キーワード：学力格差 国際比較 学力向上政策 家庭環境

1. 研究開始当初の背景

1999～2000年に、日本の子どもたちの「学力低下」が指摘された。それ以降、「学力低下論争」が活発化した。研究代表者(志水)らのグループが実態調査にもとづいて、小中学生たちの学力の「2こぶラクダ化」を指摘したのは、2002年のことである。それ以来、研究代表者は一貫して、学力格差拡大の実態把握と、その改善方策の発見につとめてきた。そのプロセスのなかで浮かび上がってきたのが、「効果のある学校」の発見であり、「つながり格差」仮説の提唱である。本研究は、それらの研究蓄積の土台のうえにある。

2. 研究の目的

本研究の目的は、日本の小・中学生の学力格差の実態を、臨床教育社会学的手法を用いて克明に明らかにしたうえで、その改善・克服に寄与しうる具体的手立てを、国内外における幅広いフィールド調査から導き出すことにある。本研究は、具体的には以下の3つの作業から成り立つ。

- (1) 国内外の既存データの再分析から、小・中学生の学力格差の実態をマクロに捉える。
- (2) 参与観察とインタビュー調査により、特定地域における学校・家庭環境の相互作用という観点から、学力格差生成のダイナミクスをミクロな視点から描き出す。
- (3) 国内外におけるフィールド調査によって、子どもたちの学力格差の縮小・改善に寄与している政策・取り組み事例を収集し、その克服への道筋を多面的に提案する。

3. 研究の方法

上の課題に答えるために、以下の4つの研究グループを組織した。

統計班	リーダー：川口俊明(福岡教育大学準教授)	上の(1)に対応
家庭班	伊佐夏実(宝塚大学専任講師)	(2)
学校班	若槻 健(関西大学教授)	(2)
国際班	ハヤシザキカズヒコ(福岡教育大学準教授)	(3)

本研究の中心をなすのは、経年的な参与観察調査である。これは、上記の家庭班と学校班、および国際班においての主要な研究方法となった。においては、国内外における多様な学力調査研究の包括的なレビューを行ったうえで、利用可能な統計データの分析を行った。

4. 研究成果

本研究の成果は、2019年度中に明石書店から刊行予定の「シリーズ学力格差」4巻本に包括的にまとめられることになっている。以下にその概要を示す。

統計班

本のタイトル：

日本と世界の学力格差

概要：

本書は3部構成である。第1部では、これまでの学力研究のレビューを通して、現時点の日本の学力研究の到達点と課題を明らかにする。第2部ではPISA・TIMSSといった国際学力調査から、日本の学力実態を論じる。そして第3部では、ある自治体で実施された学力調査から、国際調査ではわからない日本の学力格差の実態について分析を行う。なお、補論として、近年注目を集めるフリーの統計ソフトであるRによる、PISAやTIMSSの分析方法について論じる。

目次：

1部 学力研究の現状と課題

- 1章 学力研究のシステムティックレビュー - 国内編 -
- 2章 学力研究のシステムティックレビュー - 国際編 -
- 3章 PISA データを用いた8カ国の学力・非認知能力・学習習慣の学校間格差の国際比較
- 4章 TIMSS2015 データを用いた各国の教育比較
- 5章 日本の学力格差の拡大・縮小に関する分析

II 部．学校班の学力調査を利用した分析

- 6章．学力の階層差とその経年変化の動態 - 成長曲線モデルを用いた分析から
- 7章．成績の変化が学習時間の変化に与える影響の検討
- 8章．社会関係資本の量や学力に及ぼす影響は学年段階やSESにより異なるのか
- 9章．多重対応分析による子育て空間と学力格差の把握
- 10章．不利な環境を克服している児童生徒の指導方法と学習

家庭班

本のタイトル：

学力を支える過程と子育て戦略

概要：

本書では、就学前後4年間の追跡調査を通して、子どもの学力を支える家庭の力の諸相を明らかにする。子育て世帯を対象にしたインタビュー調査と訪問調査をもとに、各家庭が自らの有する資源や資本を活用しながら展開する子育て戦略が、子どもとの相互作用を通じてどのように実現しているのか、さらにはそれが学力とどう結びついているのかを経時的に検討する。本書で対象とするのは、大都市近郊に居住する専業主婦を中心とした比較的教育熱心な層である。研究当初の関心は、学力格差の背後にある階層間の子育て戦略の差異を導き出すことであったが、調査をすすめる中で明らかになったのは、親の学歴や家庭の所得による学力差が見えにくいということであった。そのため、なぜ、そうした差異が見えにくいのかに着目し、本書の対象である「教育する家族」において、経済資本や文化資本の多寡が子育て戦略にどのように影響しているのかだけでなく、そうした資本の制約を受けながらも子どもの学力を支えるために活用されている資本や資源の存在について、事例をもとに丹念に描き出す。

目次：

- 第1部 学力格差と家庭の子育ては関連しているのか
 - 1章 子育てと学力に関する研究動向
 - 2章 本書の目的・調査概要
 - 3章 量的データからみる子育てと学力
 - 4章 訪問対象家庭児の学力実態
- 第2部 子育て家庭のエスノグラフィー
 - 1章 子どものあらゆる能力を伸ばす
 - 2章 予測不可能な時代をたくましく生きる
 - 3章 学力は武器になる：従来の近代型能力育成をめざす子育て
 - 4章 こだわりを持たずに子どもを見守る：自然な成長にまかせる子育て
- 第3部 子育て家庭の社会的分析
 - 1章 生活・学習と習慣：日常生活はどのように組織されているか
 - 2章 言語と親子相互行為：家庭における言語能力・読解能力の育成
 - 3章 ネットワークと情報：親族やママ友が運ぶ情報はどう活用されているのか
 - 4章 教育意識・教育期待：親は学力をどう捉え、子どもに何を期待するのか
 - 5章 学校との関係：教師とどのような関係を築いているのか
- 第4部 階層と子育て、学力研究に向けて
 - 1章 家庭が学校に近づくとはいかなることか
 - 2章 子育て力に格差はあるのか？日米研究の視点から

学校班

本のタイトル：

学力格差に向き合う

概要：

本書では、低学力の児童生徒の学校での様子をエスノグラフィックに記述し、どのような子どもたちが低学力状態にあるのか、かれらがどのような困難を抱えており、その困難は学校の取り組みによって軽減されるのかを明らかにする。私たちは、異なる社会経済的背景の地域を持つ2つの中学校区の学校（各1小学校、1中学校）において、3年間のフィールドワークと学力調査・質問紙調査を行った。この調査をもとに、子どもたちの学力の3年間の推移を追跡し、学力格差の縮小・拡大に学校教育がどのように影響を与えているのかを明らかにする。また、同じ低学力の子どもたちであっても、地域背景の差異や学年段階の差異によって学力形成を促したり妨げたりする要因は異なっている。本書では、子どもの家庭背景を踏まえた上で、彼らの学校経験や学力形成の動態を捉え、学力格差の拡大・縮小のダイナミクスを明らかにしていきたい。

目次：

- 部 調査の概要と学力の推移

- 1 章 問題設定と調査の概要
- 2 章 X市の学力実態と階層間格差 学力・生活アンケートのパネル調査から
- 部 各校のエスノグラフィー
- 3 章 A小 - 個に応じ自立を促す学習指導
- 4 章 B小 - 教師と子どもの支え合いを通じた学力保障
- 5 章 C中 - 共に学び自立を目指す学校文化
- 6 章 D中 - 集団での学びと進路保障
- 部 分析編
- 7 章 子どもたちの変化
- 8 章 教員文化と学校
- 9 章 学力保障につながる班学習とは 中学1年生数学の比較から -
- 10 章 マイノリティと学校文化
- 11 章 フィールドワークと統計分析

国際班

本のタイトル：

世界のしんごい学校 世界は学力格差にどう対処するのか？

概要：

各国について、1) 国の格差是正施策、学力政策全般、2) 地方の状況と小学校のエスノグラフィー、のそれぞれ2章にわけると。ウリは、エスノグラフィー的なところ、および、国際比較。前者だけでも後者だけでもこれまで存在するが、エスノグラフィー（具体的な現場の様子）の比較はない。前者と後者のミックス。かつ東アジアの3国の学力格差是正策・現場の実践も新規。日本語と英語の2つです。まずは日本語（2018年度 全体で初稿が2018年12月と決定-2019年3月出版希望）。そのあとに英語（2019年度）。

目次：

序章

PISA+TIMMS、学校文化の比較、教員の意識の比較、学校外の支援、エスニシティ、貧困、男女、etc

第 部 学力格差是正策の状況・国際比較の章

各国の章（1～7章） 内容は学力政策・学力観・就労と学歴の関係等

第 部 小学校のエスノグラフィー

各国の章（8～14章）

終章

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計0件)

〔学会発表〕(計0件)

〔図書〕(計4件) *上記のもの(今年度中に刊行)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年：

国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

取得年：

国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名：志水宏吉

ローマ字氏名：SHIMIZU KOKICHI

所属研究機関名：大阪大学

部局名：人間科学研究科

職名：教授

研究者番号（8桁）：40196514

(2) 研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。